遞信省認可

いらつめ第四十二號目次（明治廿三年二月十五日）

●挿　畫…浮世の苦しみ（石版額畫）…はくヱッさ
●家　政…料理法（第十一）……岩間芳松
水煮鷄＝鳥バタ焼き＝日本風鳥バタ焼き＝バタ焼き附け合はせ
○縫ひ取り獨學び（第一）……神宮みれ子
麻つゞミ＝菊麻＝松川菊＝七寳形＝花木瓜
○押し繪獨學び（第七）……石原一枝嬢
鷺の畫額
●文藝美術…口紅のあさ（韻文）……小芙蓉
美人雪夜（文章數篇）……三坂きぬ＝蘆野洞三郎＝鹿叉松乃
●雜　纂…日本陶器小史＝舊幕時代の監獄…逸假名法＝其他
●寄　書…諸嬢へ……大川晴雄
●懸賞文藝に就て……桂蕣小史

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二十九錢郵稅共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵稅共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵稅共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵稅共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六十五錢郵稅共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵稅共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府內に限り無郵稅●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證さして雜誌の表紙に成美社の捺印と加へましたから是を目標さして御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任ぢません。捺印の無いのを御求に爲っても代金支拂に及びません

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年二月十四日印刷
明治二十三年二月十五日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

本號には米人はくヱッと氏揮毫石版額畫が有ります

第四十二號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第四十二號

家　政

改良實用衛生料理法（第十一）

元鹿島舘料理人　岩間芳松

三十四　水煮の雛調理法。　鳥を水煮にして食べるのは此汁を用ゐて食べる事が肝腎です。　第一鳥の滋養分が散じ肉中の養分を失なふからです。　雛鳥肉足と胴と別々に切り（切方大小論なし）鍋に鳥を入れ、鳥にかぶる程水を入れ、火に掛け、浮く滓を充分取除き、鳥一羽に付き葱、人參大切二切づゝ入れ、鹽を少し加へて、蓋をし、充分煮て、柔らかになれば、鳥を皿に取り、汁を漉し、別に人參、馬鈴薯を賽の目に切り、鹽湯出にし、青豌豆を亦鹽湯出にして、鍋へ牛酪を少し入れ、解かし、三品へ胡椒を振り、よく混ぜ合せ、皿に取り、又鍋に牛酪を入れ、火に掛けて解かし、饂飩粉を少し加へ、弱火で能く混ぜ、鳥汁を少しづゝ入れてのばして攪和ぜ（玉のできぬ樣にし）、肉豉（藥種屋にあり）を摺り加へ、能く煮、之を裏漉しで漉し、鳥、野菜共に入れ、又一煮して、出すのです。

但し、少し甘味を用ゐるも宜しく、野菜物は時々見はからつて用ゐます。

三十五　鳥の牛酪燒洋名カツレツ。　雛鷄の股を庖丁にて取り、羽骨大身に付き庖丁を入れ、大身を取り、皮をむき去り、足の下部の骨を一寸程殘し、縦に庖丁目を入れ、骨を拔き去り、殘る骨と上から下に折返し（大身の骨付におなしくし）、大身と股肉と庖丁の脊で上から下まで柔らかく叩き、鹽、胡椒を振り（フライ肉とおなしく）、麪包粉を掛け置き、鍋に牛酪と脂肪を少し加へて火に戴せ、牛酪の色の變つたとき鳥を入れ、兩面色の附く程（俗に狐色といふ）に燒火を通し、皿に取つて油を絞り、此鍋に肉燒汁か又は鰹節汁等を少しに醬油を加へ、一沸にし、鳥の下に敷き、此汁を鳥に附けて食へるのです。

三十六　箸と用ゐて食べる鳥の牛酪燒調理法。　鷄肉を薄く一寸程に切り、庖丁の横で能く打ち、鹽、胡椒、玉子、麪包粉（觀世麩の粉にてもよし）を振り、前の樣にして（カツレツに同しくし）食べるのです。　又牛肉、鷄、鴨、家鴨等の肉を薄く切り、打て、胡椒を振り、饂飩粉又は葛粉等をまぶし置き、油鍋へ牛の脂肪（胡麻の油にてもよし）少し入れ、前の肉を入れ、兩面を少し燒き、皿に取り、油を取て此鍋に味淋を少し入れて氣を拔き、又肉を入れ、醬油を加へ、味を附出すのです（葛粉は大皿に葛と入れ茶碗にて押しいぶし水篩にてこすべし）。

三十七　鷄肉牛酪燒に添へる附け合せ物調理法。　ほうれん草を水で洗ひ、鹽湯に重炭酸曹達を少し加へ、沸騰した所に入れ、蓋をしずに急に湯出、柔らかになつた時水に取り、又水をしぼつて、庖丁で細かに切り、毛水篩で裏漉しにし、鍋に入れ、胡椒又は肉豆蔻を一摘加へ、肉燒汁又は煮出し等を少し入れ、練つて付け合はせるのです。

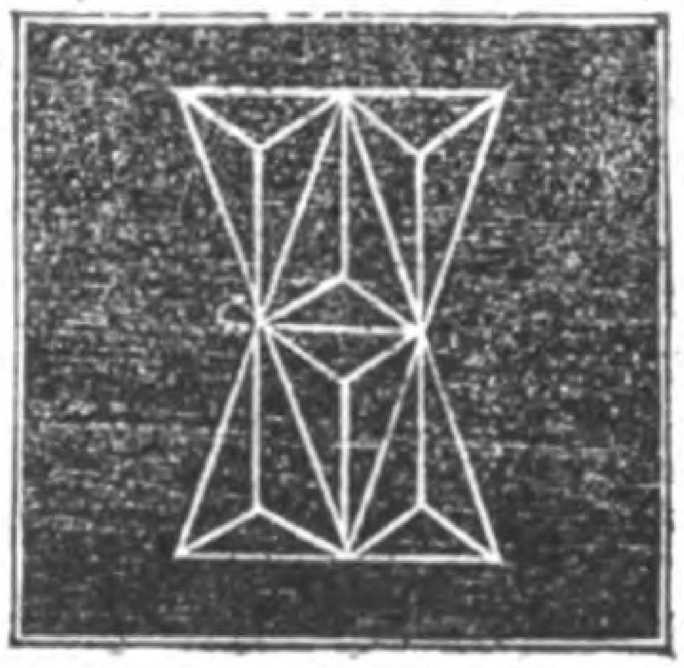
刺繡獨學び（其一）

神宮峰子

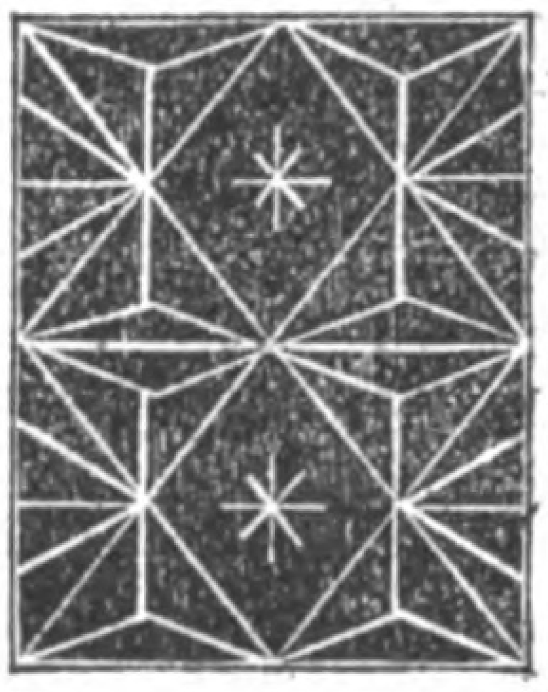
刺繡は針目さへ揃へハ針許りで出來て隨分樂みにもなり經濟のものです。最とも服紗やハンケチ半襟などへ六ケ敷き模樣を縫ふにはかた紙丸刷毛面胡粉が入りますが、夫にしても誠に手易い縫物です。縫帛抔は孰れも臺張に張ッて縫ふのですから道具も色々入り手數の掛る事が一ト方で有りません。夫れのみならず洗濯すると縫帛は絲が緩みますが刺繡は其憂ひが有りません。

先づ茶ぶきんの縫方から申上げます。茶布巾ハ晒らし木綿か鬱金木綿一尺二三寸を二つ折に〆て尤とも糸は草色か紫が白にもうこんにも移りが宜しいです。そして筋は角篦にて付け罌粟粒の如く針目を揃へ成る可く糸に繼目の出來ないやうに順序を考がへ細かに縫ふのです

麻皷



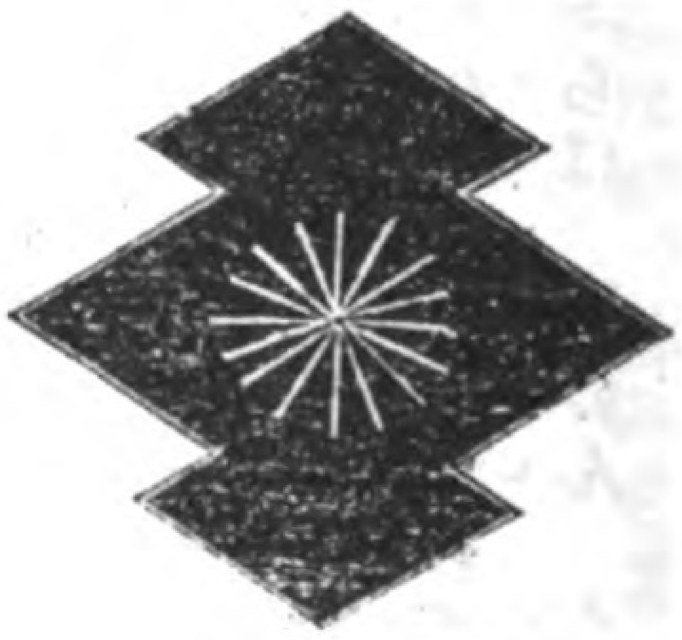
菊麻



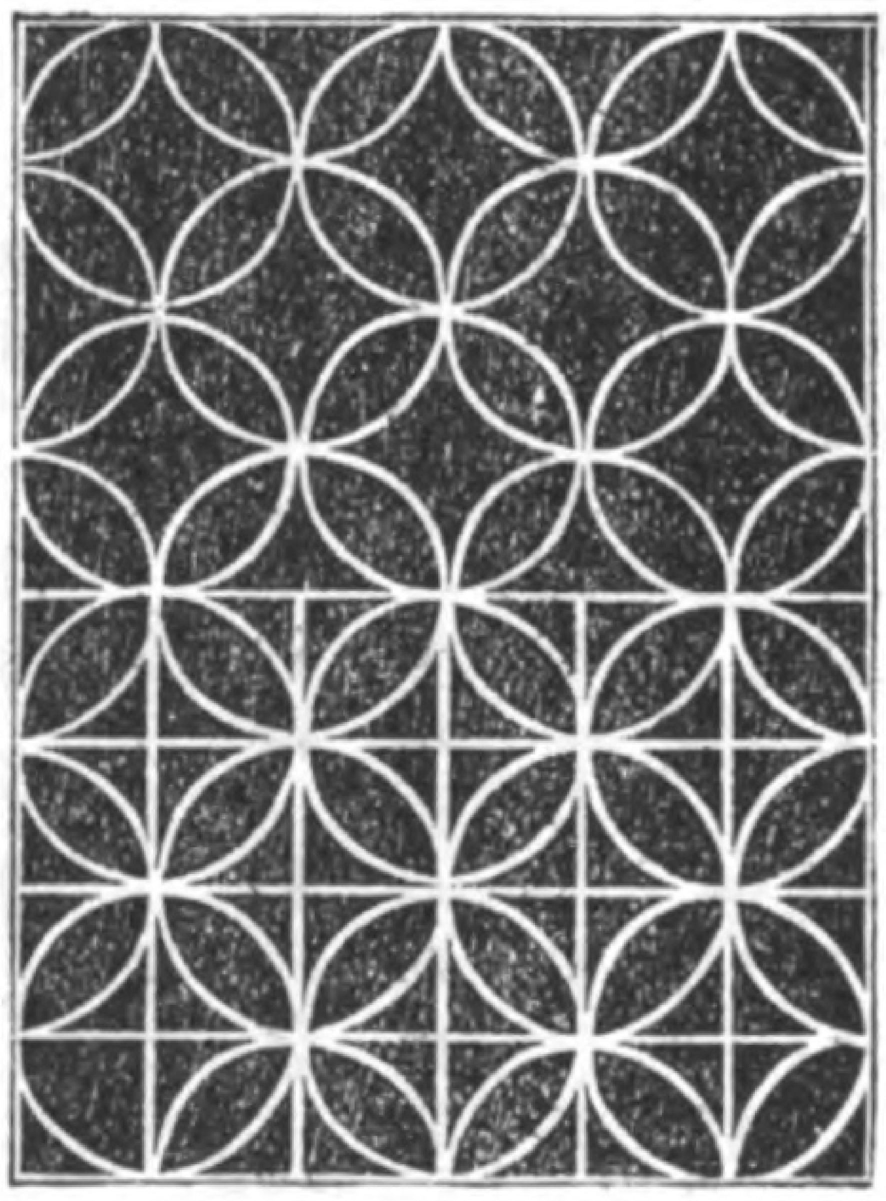
此麻皷は先づ三寸なり四寸なり一の符の筋を付け二の筋は一の筋の眞中へ付く樣に雙方より引き跡ハ圖の如く筋を付け一の符號から縫始めるのです

菊麻ハ圖の如く角の筋を付け、次に角の隅より隅へ斜に二本の筋をつけ次に菱の筋をつけ、跡は圖を御覽になれば菊も麻も出來ます

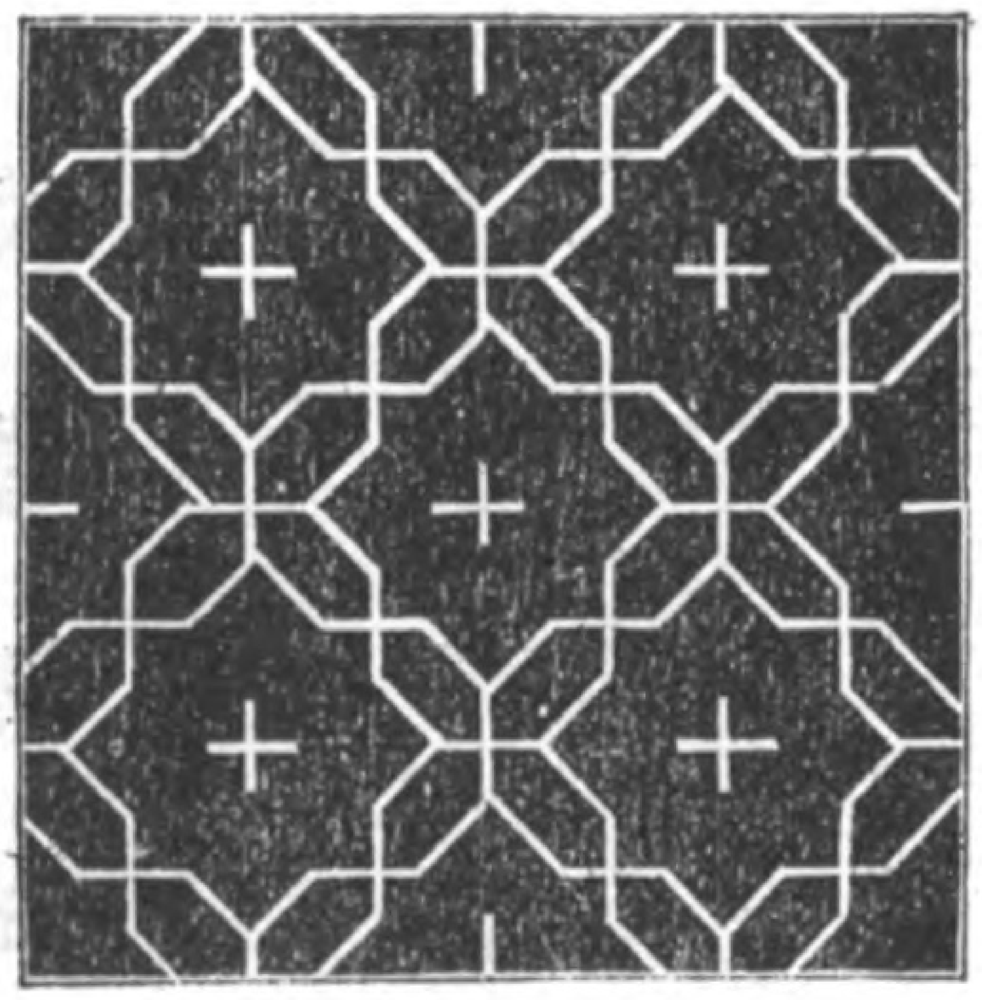
松川菊



シッパウガタ



花木爪



松川菊は厚紙にて松川菱を切り、夫をあてゝ筋を付けますとひづみがなくて宜しいです。

シッパウガタは厚紙にて丸を切り、丸の直徑二寸ならば一寸づゝに碁盤の如く筋を付け、圖の如く丸形をあて筋を付け、角の筋は殘し丸の筋許かり縫ふのです。

是は組縫と申して裏表に糸を浮かし、圖の如く針目を組ませる樣に縫ふのです。此縫方は始め十の字を縫ひ、十字を一つ置きに兩方より圖の如く斜めに縫ふのです。

（以下次號）

押し繪獨及び（第六）

石原かずえ

いらつめ第四十號鷹の繪額の張り方のつゞき。
葉を張るには臺木からさきへはり、切れ地はこげ茶のちりめん又は絹でよく、それで圖（四十號にあり升）のやうに張り、ふしぶしは跡から彩色し、上の方の枝は元木から少しく淡茶色の切れ地ではり、ごく細い葉の柄は赤の絹糸に糊を引き、臺の切れ地の裏へ結び、表へあらはし、又裏へ透して結び目を出さしめるのです。　葉の張り方は前に寫眞入れの處でくはしく言ひましたが、此圖は前とすこし違ひます。其故は前の圖は盛りの紅葉の圖、この圖は冬のあれ淋びた夜の景色で、葉も烈風にあつた殘んの葉ゆゑ、葉の數も從つて少なく、又色あひも同じ色でいゝのです。　が、造花の繪の具で之を塗るには葉の先きをフロクシンとヨーシンと半分づゝ染め、もとの方をマセンダで染めると本當の秋葉のとほりになります。

文藝美術

口べにのあと（韻文）

小芙蓉

くちべにの
わと　なつかしき　れんけちや、
きぬの　はだへを　たれにかも
ミスの　中なる　しのびでま、
こゝろの　こまも　くるふかな。
うんじよ　そこらに　氣を　かねて
たどれは　妬む　つきしろに
人來と　知りて　さても　紫痴、
花を　護る　いぬ　われを　吠ゆ。
いもがき　せがき　かどの　くち
きみが　手巾を　ひらひ　つゝ――
あゝら　うつり香、　うゥつり香――
その　うつり香を　かへし　てむ。

＊　＊　＊

きても　とざしは　カメをり戸
あけて　いふべき　すべ　とても
ナみだに　ふでを　いさ　ひたせ。――
「かへし　まゐらす。　いかに　せむ、
ねぶらは　さねん　くちべにの　あと。」

第十回懸賞文藝

題美人雪夜に佇む　鹿又松乃（イハシロ）

「霜は軍營に滿ちて秋氣淸く數行の過雁月三更」其等の影を宿した越山の景色も已に暮れて梢を鳴らす朔風の强さ！　肌をもつんざきさうな寒さ！　柳絮の飛ぶ如きものゝみを見た人々には積りさうにも思はれぬ程の細かな雪――それが却て深くなる大野の里　吹雪にかゞやいて灰かに見ゆるは兵士どものたくかゞり火　此の寒空に野陣を張る兵士――それも雪は絶景の美、銀世界とたゝへ、吹けば雪を消すあどゝ東太洋の風を怨んだともある殿方。　如何に勤王に熱く愛國に切なればとて北海の風雪には手も足も氷るばかりでしやう。　併しそれば遙か彼方の幕の中、素よりしかとはわからない。　夜も更けて草木も眠る頃となつたのでしやうか、梢に鳴た風も雪と蒔た雲も皆引拂ッてたゞ月ばかりが空高く時を得顏に下界を照し白金黃金を吹き散して居る　はて不思議今頃――行くのか來るのか佇む人影　まして袂と裙との長く見ゆるはあゝ敗卒となつて迷た風か路傍の松にかゝつて雪を散らしたそれに驚て何か心つきし樣子

おヤー陣所は？　あんなに

二歩三歩戻たが、ふみとまりて重さうに顏をあげ、そして東方にむいた

昔し此の越山の景色を見て故鄕を慕たのはし英雄　あァ英雄も…………そして彼れば直ぐ歸り

うらめしさうに近江境の山を見つめたのでしやう　たれた頭を再びあげたのは

阿父さんは海野へお出遊ばしてどうなさつたの？　事のならないので若しや――まさか　併し今なほ……今宵御評定の模樣では一橋樣への賴みも叶はず加州にお降り遊ばすとか假令降つたとて…………覺悟の身なるにあァ何ぜ？

「さもあらばあれ家鄕遠征を憶ふ」たゞ一筋と張つめたのも、此の景色此の寂寥たる夜景には、みたれ〳〵て八萬四千もウ抑へるとも出來なくなつた

あァ吾妻に在す阿母さんは…………もウお顏をば…………筑波に居た中は折々しのんで來た乳母――あれが此の身の…………あの世に…………

身体の次第にふるへて來たのは風の爲めか？　否心の起した波

に＝何も……われとても
決然として歯をくひしばつた　折りしも何處よりか吹き來た
つた風　風に被りしものをとられ其を右手にうけて、ほつれ
髪をくはへ月を仰て凛然としたる其の顔ばせ瞼に宿る玉の光
り、拙に寫せば眞を誤るの憂がある　ふと、かたへの松に眼
を注ぎ

松――霜雪に逢ふても――松

につこりと笑ふたのは？　俄に何か思ひついたやうに陣營の
方をさして行き次第に遠くなつた直ぐに、あとを追ひかけて
見やうとしたが、あゝ無情復も吹雪が強くなつて其の影をか
くした
あくる元治元年しづ心なく花の散る頃となつて「三月の初め
武田藤田の黨が敦賀で刑せられた時、田丸稻之右衛門の娘松
子と云ふが其の父の墓前で自殺した」と云ふとを聞たばかり
もう其の女子の姿も影もたつぬることは出來ない

右第三等賞

美人雪夜に彳む

鹽野潤三郎（イハシロ）

「美人雪夜に彳む」さても難題　容易には起らぬ現象　事實として殆ど的例の無い程……總じて一の現象が起るには必ず起るべき原因と事情が有るもの……美人が雪夜に彳むと云ふ奇異な現象ハ抑如何なる原因事情に伴ふた結果でせうか
或は繪畫に熱心なる爲め雪夜の眞を寫さんとて……或は詩歌を嗜好する爲め雪月の奇を詠ぜんとて……或は愛妹が夜會より皈りの晩きを案じて……或は訪はんと約して時刻に後るゝ友を待つとて……雪夜に彳む美人も有りませう　或は戰陣に病卒を看護して風雪客衣を襲ふの夕　家を懷ひ又國を思ひ感慨胸に滿ちて忠愛の熱涙と雪中に灑ぎ……或は客窓孤燈の下已往を追懐し將來を想像し「故山の老親は此雪に嘸……」「天涯のあの人は今頃はどうして……」などゝ思ひを取り亂して雪中に立つ可憐嬢も無くは有りますまい
が　此等の現象ハ何人も容易に寫し得る所　何か新奇な……
窓を開けば　午后からの雪が　まだ　ちら／＼……　しかし朧の月ハ薄き眞綿の雲に顔をつゝませて　下界を見渡す風情常盤木は暫し其色を失ふて枯木が却て花を咲かせ　天地は只純潔の氣に充たされて居ます　あゝ　此純潔の天地に思想感

情の純潔なる美人が彳で居たら　美の又美粋の又粋　あつぱれ一幅の好活畫で有らうに……などと考へながら　いつか四五町歩みました

ことは　愛友梅子の家です　門扉相た鎖さず　軒端の古松池邊の寒梅　月と雪とお化粧して人待顔……其邊に思案の頭を低れて彳で居る一人の處女　梅子に相違ありません　余はつと門を入て「出來ました／＼美人雪夜に彳むが出來ました」

梅子は「あら喫驚致しました　どなたかと思ひましたわ　りして　いやですよ人……美人なんぞッて……いらつめの美人雪夜に彳む）を作らうと思つても　どうしても出來ないんですものを　それから實景を視察したら若しやと云ふ野心に誘ひ出されて今迄立て居ましたの」余は微笑して「私も美人が雪夜に彳むには如何なる原因が有るのかと思ひましたが　矢張　美人雪夜に彳むと云ふ題が　美人――あなた――を雪夜に彳ませたのでした　課題の勢力も油斷は出來ませんねー雪夜にも美人と連れ出しますから」此後は爐邊の好話　しかし此題に縁はありません

右第二等賞

美人雪夜に彳む

三坂きぬ（十七）

『二ッ屋　落合から此處迄ハ二里　此處から高尾迄ハ　國を違へて　誠山計りの五里あるのです　しかし「彼處迄到りついたれば明日富山へ入る都合殊によろし」とのことに　又もや此處を出で立ちました　これからハ嶮悪のつゞらをり計り弱足の意に任せぬ歩みは　足滑らして　路の傍への茨に屍を劈いたことも幾度が　滴たる血潮を果敢ない記念として　崩れさうな崖を傳び　落ちさうな橋を度ッて行く中　夕日は花やかに晴れて　前山の頂―見れば猶昨日の雪―其清浄潔白の面に　照りうつる輝きは　世お見ぬ錦を閃めかして居ました事無い日でなれば　神の世界お在ると云ふ標準の美の眞相とも　精しく眺めましたでしやうに　心茲に在らぬ身は　唯雪催さぬしるしと頼母敷思ふて居ました　がそれは仇　間もなく　かけは隠れて　空掻き曇り　殊に暮の色は一人を擇ばず―遠くから身に押迫ッて來ました　固より「高尾へ着くれ夜に入ッてから」と覺悟をして居たものですから　數多くでいおりませんが　たい松を齎らし付けて居ました　しかし「豫想の外に後れたものを　晝の中―空の氣合も悪しとし行き能ふ丈は行かずば」と　足を一層早めましたが　幾程もな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く 日はすッかりと暮れて仕舞ひました これからは 焚く火に路を照して進んだのです あゝ やがて壹里は來ましたでしやう 處は正に金剛峠 果して又雪です 繽紛と顔を打ッて來ました 之に伴なふ山颪 時を經るにつれて烈しくなり 何れにとおく度る物凄い響 目も明け能はぬ計り 此場ー深山の中です 如何の策お據りましやうか 已むを得ぬ必用に纒はれて居る身 一歩一歩に極量の注意を寄せつゝも猶限り無い危さを冒して居ました があゝ 重なる不幸 左は谿右は幾百尺の屛風を立てた樣な山ー其山の半腹に傍ふたきはどい細逕を辿る中 如何の機か 背に束ねた松の繩が……切れたと云へぬ間ー氣付いてー片手を伸しました が早及びません 影も殘らず 底知れぬ谿間へ 落ちた其あと眺めたまゝ暫時 顧れば あはれ 手に握る僅の光さへ燼きて居ました 火は全く此處で燼きました 最早一歩も歩めぬ詮無さに 其邊に在る幾抱への老樹の蔭に 主ない宿とかりました 天地ー思へばー唯一人ー風は走り雪は飛ぶ其中に 孑然イんで居ッたのです 人は固より彼熊狼も古洞に煖かい夢を護ッてゞも居るのでしやう 聲さへ聞かしません ツと上を仰げば むらくとした黑雲雪を映して色薄く 其一部には

微かに光る星ー「神の笑顏の俤」 あゝ神は此苦患を與へてしかも喜ばれるか 疑ふ心から 湧き來る悲淚ー「あゝ此淚と共に慈愛に照らされぬ我身も 氷るうきめに」……とまで思ふて居ました が 夜は遂に明けました 白一色のおるた 一簇の家 朝餐炊くのでしやう 煙の立昇ッて居るのまで見えました 聞たのに思ひ合せば 慥に高尾村 達すべき彼岸を認め得ては 飛立つ計りの嬉しさに心も勇み立ッて 止まぬ雪ゞ凪がぬ風も厭はず 時は早十九日の午前九時でしたー其宿の宿に着きました 馴れぬ草鞋の紐 其疵の痕さへ洗はず トクく爐火の傍へお寄りました が 目はくらみ耳は聾ひて納りません 殊に胸先に痛みを覺えたものですからものも得喰はず 夜着打ちかづいてふせりました」

實に之は二年前ー妾が十六の年の冬 遠く兄を逐ふて飛彈から越中へ赴むきました其時の道の記の一節ーこはさも恐しさも打忘れて獨り山路を越した部です 申すも嗚呼 なれど誠蕾の花ー詩人の評をかりて云へばーーの齡です 草深い中に生ひ立ッた一もと菊ながら 此の時めかすべき時ですその風を賴りに床しい匂を癡に薰らしたいと思ふ心は、花の都の 櫻牡丹ー色讓らぬ媛達に どうして變りわりましやうか が

生計と云ふ強大な勢力に驅られては　袖に置く涙の露も甲斐なく　雨の浴み　雪の白粉　今に猶人知れず　人呼ふ色を奪れさして居ることです　あゝ世界は一つ　世界のさまはさて一つではありません　消極の側には妾の如きものもさまよふて居ます

右準一等賞いらつめ十五部

五社百詠四十號つゞき　　　俊成卿

○萩

もののふの入野のはらと知るから萩咲ぬればしかの鳴くらん
山田もるかり庵にま萩さきぬれは花にそうつる○○なりけり（欠字）
露くさき宮城原の萩さかりにしきのうへにたまそちりける
春といひしひとにみせはや津の國の遠里小のゝあき萩のはな
身にしむるあきとは萩の名なりけりつゆに花さき月に鹿なく

○女郎花

をみなへし露をは玉のかつらにて霧のまかきに立かへるらん
女郎花とらふす野へに匂ふともをらていかで人のすくへき
すか原やふしみの野への女郎花たれになれてかけされ露けき
あれなる夫當（本のまゝ）のをみなへしおもひしはれてつゆけかるらん
女郎花色にめつとはいひなからさのみや野への露にしほれん

○薄

過かてに我こそみつれ花すゝきなひくは風になひくなりけり
何事をおもひみたれて糸すゝきはに出なからむすほゝるらん
つゆむすふあたのおは野の花薄何まねくらんそてぬらせとや
はりまかたゐなみの野のへ花薄むら〱よする波かとそみる
いてにけりいりのゝ原の初尾花誰かまくらにしなへてもみん

○苅萱

神かせや宮のゝ原のかる萱をからてのみやはすきんものかは
はし鷹やいつとやたしの秋風にまたきしほれぬ野ちのかる萱
あはれなる野邊のかるかや亂ても下葉いしいし露とまるらん
昔より誰みま草に玄のふとてかるかやとしも名つけそめけん
なをしとてあさのよもきは何ならそ亂れてもあれ野邊の苅萱

○蘭

ふちはかま草の枕にむすふ夜はゆめにもやかて匂ふなりけり
ふちはかま咲ぬる時そむさしのゝ若むらさきの色はみにけり
藤はかまおもひこそやれはなの時くさのいほりの秋の雨にも
あきのきてほころひにけりふちはかま移る香こくも猶香ふ哉
藤はかま匂ふうてなもよすなりきわやなくふれし苔の袖とは

雜纂

日本陶器小史（其二）

伊萬里燒　一体古昔から伊萬里燒といひますが、其實ハ有田で製造する者で、伊萬里は畢竟發賣元の名と云つても可いです。　同所の陶器は粘土の良好なのと、染付に熟練なる爲め、破裂の憂ひが少ないゆゑ、實に内國で牛耳を執るものです。　殊に彩畫に用ゐる色料の青黒赤緑等も多年の工風に成るゆゑに、舶載に勝ること遠く、金色なども九谷に比ぶれば、燦爛目を奪ふやうな華麗を專一としませんから、自づから特別の韻致かあるです。　元と繪畫の古風を守るのに根據するとはいへ、開祖祥瑞五郎大夫の遺法と征韓の役ニ鍋島直茂が連れて來た朝鮮磁匠が新業を授けた遺傳も中かく預かつて力わります（朝鮮磁匠の子孫が今現に有田に存在すると申しそま）。　故に我邦の陶器の早く歐洲に知られたのハ實に此伊萬里で、蘭人が長崎の出島で貿易を營なんだ頃已ニ外國市場に名を博し、今でも肥前陶器と云へば、薩摩燒と雙んで賞擧せられます。　然し同處ハ專ら我邦固有の裝飾を失なはせまいと勉むるゆゑ、兎角に形狀が時好に投ぜない樣な遺憾があります。　流行を追つて、濫製を招くやうなのに比ぶれば、遙ニ上手ですが、販賣の區域に於ては如何ですか、深く思慮すべき事です。

薩摩燒　是は島津義久氏の征韓の役に鍋島氏と同じく朝鮮の磁匠を拘致して來て、鹿兒島の近傍に住居させ、製造させたのを權輿と致します。　當時はまだ完全な陶器を出しませんでした、が以來數回の經驗と工風とに由つて、始じめて現今のやうニ名器を製するに至りました。　想ふに昔古から高麗燒といつて、濃茶者流の玩弄した茶椀や水注其他の器材は多くは此の元の薩摩燒の物でしやう。　同所の陶器は磁器に屬すといはずに、石器に屬すとまうしまそ。　而して其の粘土は精純な磁器の混和物のやうに熔けません、或ハ熔けることがありましても、これハ時として火度を同じうしないからです。　然し磁器の質は十中三四を含むゆゑ、一概に石器に屬すとは謂へません。　釉藥ハ多く長石性の天造物を用ゐますから、竈から出て冷めますると、細美麗のひゞか出來、愛らしい象を顯はします。　歐洲市場で聲價のあるのは玆ニ基きます。　近來東京及び横濱で野州產の粘土を以て摸造します、が量目や色ひゞとも到底及びません。又外國人も能く之を識別します。　倘て同所の陶器と評しましやう。　其の

生地は少しも脱落ところはなく、又其形状ハ亦頗ぶる外國人の心に適なひ、倍すく好評を得ますけれど、只だ惜しい事にハ同所でする繪は夫の得意な秋草ふ金砂子其他二三の飛禽艸花を除いての外は皆拙劣で、尋常一様の浮世繪にも及ばない位です。から常に生地を東京及び横濱神戸等に輸出して、此の三所で畫き、後ち内國は申すに及ばず海外へ送ります。

舊幕時代の監獄（其三）

次に左の言ひわたしをしました。——

「ゆふべ來た新入、牢の法度を申し附る、聞いて置け。牢ハ初めか、もと來たか。舊來ても初めて來ても疊一疊々々ふ格式之れあり、六ケ敷い所だ。われがゆふべ這入つた所は御戸前口とも獄屋門ともいふ。那所へ入るや否や、十も二十も撲て撲投り出して爲ること被爲ることもあるが、十二人御役人旁はりを以て爲るもさせるもならぬぞ。われが夕べ一寸夜を明かした所は無宿の大牢の落間だア。あすこへ這入るが否や、十日や廿日五十日百日で上る處ぢやアねエが、御牢内は先年より格式があつて、下座の牢人上座の牢人でき口の御牢人さん、あれも娑婆ぢやア謹愼らしい若い者だつて、疊の端を御願ひなされ、今朝また御隅役さまに御願ひ申して疊の端へ出してやる。疊のはしへ出りやアわれが掛りにやア本番助番とかふ役人の指圖に從がひ唯々と云ッて働らかにやアならねエ。働らけと云ッて娑婆で小盗み小泥棒薪を割ッたり米を搗いたり、そんな忙がしい事ぢやアねエ。今に當てるが夜に一時の草履番、夫を謹愼に相守るべし。それも娑婆の氣質を出して向ふ通りの同座の囚人と相手どり、喧嘩口論がましいことでもすると、御牢内格式の仕置申し附る。牢内にハだん／＼仕置の多い處だ、もッそう仕置に海老手鎖三足手鎖にさや磔りつけ段々ぶッて／＼撲廻し又も仕置の多い處だ。汝が御奉行様から出牢證文のくるまでハ日に二本のもッそうめしをくらッて謹愼ふして居ろ。汝もまだ素人のこと、白い黒いの深しい御禮も知るめエ。うぬが掛りハ本番さん助番さんの媒介を以て牢人さんに逢て御禮を申して貰らへ屹度申し付けたぞ、手をあげて座にゐろ。」

漢字異語同義（其二）

秀溪子

いかでか
爭　なんとしてと云ふ氣味。
いる
射　弓で物を射ること。又光などの物を透つて照す事。
いたむ
痛　いたみを身に覺ゆる事。悲哀の切なるに用う。
疼　疼痛とつゞく。うづきいたむこと。
悼　人の死するをかなしむ事。思ひをうるゝ意。
愴　時節に感じ風景を見てかなしみの起ること。心中よりいたみの起ること。
慘　心の底につらく思ふこと。いた〳〵しきこと。
悵　あてにめたことがはづれて、はいるく殘念に思ふ事。
惻　心にそれをいた〳〵しく思ふ事。
怛　今身にさしあたつて驚きいたむ事。
慟　哀のすぎて、悶絶する事。
惘　いたんで、心ののびぬ事。
怵　物にうごかされて、心のそれに引かる事。
傷　心にそのことを思ひわづらふ事。身にいたみがあるごとき事。
隱　そのことを思ひやりて、身にとつていたむ事。
楚　いたみがつよくて身うごきもならぬきみ。
戚　喜の反。いたみうれふる事。
弔　氣の毒に思ひ、その心をなぐさめるきみ。
譆　嘻と同。いたみよばゝるやうなこと。
いながら
坐　つがもなく、やす〳〵とする意。
居　その地位にあつて、いまだ動かぬきみ。
いどむ
挑　そびらかし。向をつり出さんとする事。
抉　くじり出す事。とり出す事。
いたづがはし
煩　やかましい事。人に事をたのんで、せわを掛る事。
いざなふ
倡　音頭を取つて、先達する事。
誘　人をさそへそゝめて、引出す事。
いたゞく
戴　首上に物をのせ、つり合せもて行く事。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

頂　頭頂に物をのせる事。
冠　かむりにするものゝ事。首にいたゞくものをいふ。

いむ
忌　いみきらふ事。はゞかる事。忌日のときにいむこと。
諱　生を名といひ、死を諱といひます。其故に死んだ親の名を諱といふよりいむことに用う。
憚　忌さつゝしく。はゞかると訓し、すべてぶゑんりよなこと。

いとふ
厭　あきいやがること。
斁　いやに思ふこと。

内閣官報局豫定送假名法（前號のつゞき）

斷チテ　ヲ　斷ツテ　　討チテ　ナ　討ツテ
放チテ　ヲ　放ツテ　　勝チテ　ヲ　勝ツテ

第四　リヲ轉シテツト呼フモノ
限リテ　ヲ　限ツテ　　依リテ　ヲ　依ツテ
取リテ　ヲ　取ツテ　　來リテ　ヲ　來ツテ

語リテ　ヲ　語ツテ　　覺リテ　ヲ　覺ツテ
飾リテ　ヲ　飾ツテ　　僞リテ　ナ　僞ツテ

第五　ヒヲツニ轉シテ呼フモノ
戰ヒテ　ヲ　戰ツテ　　從ヒテ　ヲ　從ツテ
奮ヒテ　ヲ　奮ツテ　　言ヒテ　ナ　言ツテ
窺ヒテ　ヲ　窺ツテ　　歌ヒテ　ヲ　歌ツテ

第六　ヒヲフト轉シテ呼フモノ
思ヒテ　ヲ　思フテ　　違ヒテ　ヲ　違フテ
沿ヒテ　ヲ　沿フテ　　舞ヒテ　ヲ　舞フテ
言ヒテ　ヲ　言フテ　　救ヒテ　ヲ　救フテ

第七　ミヲンニ轉シテ呼フモノ
涙（ナミダ）　ヲ　涙（ナンダ）　　弓手（ユミテ）　ヲ　弓手（ユンデ）
嚙ミテ　ヲ　嚙ンテ　　汲ミテ　ヲ　汲ンテ
病ミテ　ヲ　病ンテ　　飲ミテ　ヲ　飲ンテ

第八　ビヲンニ轉シテ呼フモノナリ
飛ビテ　ヲ　飛ンテ　　浮ビテ　ヲ　浮ンテ
呼ビテ　ヲ　呼ンテ　　結ビテ　ヲ　結ンテ
悅ビテ　ヲ　悅ンテ　　擇ビテ　ヲ　擇ンテ
轉ビテ　ヲ　轉ンテ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第九　リ°ン°ニ轉シテ呼フモノアリ

盛（サカリ）ナリ ヲ 盛（サカン）ナリ　畢（ヲハ）リヌ ヲ 畢（ヲハ）ンヌ

件（クダリ） ヲ 件（クダン）　去（サ）リヌル ヲ 去（サ）ンヌル

第十　ク°流レテウ°トナリ更ニ轉シテン°トナレルモノ

重（オモ）クス　重（オモ）ウス　重（オモ）ンズ　輕（オモ）クス

輕（カロ）ウス　輕（カロ）ンズ　賤（イヤシ）クス　賤（イヤシ）ウス

賤（イヤシ）ンズ　安（ヤス）クス　安（ヤス）ウス　安（ヤス）ンズ

右十ノ音便ノ內名詞ヲ成セルモノハ大抵平常文ニモ其儘ニ傍假字ヲ附シテ妨ナシト雖モ其餘ノ詞ニ至リテハ讀誦ニ任セテ音便ノ儘ニ讀ムハ別ニ仔細ナシ然レトモ明ニ辭ヲ綴リ文ヲ作ルニ方リテハ須ラク正法ノ變化ニ從ヒテ之カ送假字ヲ寫スヲ可トス

◎略字及濁音字ノ事

古來慣用ノ 〆 𪜈 𪜊 ヿ 之 等ノ略字ハ總テ之ヲ用ヒス シテ トモ トキ コト ナリ ト寫ス

又濁音字ニハ固有名詞ノ外濁音符ヲ附セス其例左ノ如シ

誰（タレ）カメメ　出（イ）ツ　過（ス）ク　論（ロン）ス　得（エ）ス

幾（ホトン）ト　何（ナン）ソ　未（イマ）タ　必（カナラ）ス　甚（ハナハ）タ

先（マ）ツ　再（フタ）ヒ　然（シカ）レトモ

アラサルヘカラス

但シ必要ノ場合ニハ濁音ヲ附シテ之ヲ別ツコトアルヘシ（完）

寄書

懸賞文藝に就て

桂蕣小史稿

我いらつめに於て先頃より廣く懸賞文藝を課せらるゝは吾等後進に取て我國文學上に取て頗る喜しき一美事なり余等は是美事に對して深く主任者其人に謝する所なり然るに近來往々喜ぶべからざる者の現はるゝあり徒らに默過するに忍びず敢て一言する所あらんとす先づ應募者諸君の注意を請ふべき者は題意を缺るなからん事是也凡ろ金玉の如き文字を羅列するも苟も其題意を失ひたらんには取るに足らざるなり余は歳暮及び美人雪夜に佇むの二題に於て唯歳月は早く過くさ美人雪中に立つさの意にて詠まれたる多くの歌類を見たり是れいかにして詠出したるやと知らずさ雖も既に歳暮さ云へば月日の早く立つの意のみならず又雪夜さ云へは雪のふりたる後の夜にはあらざるは普通の理余の辨を待たずして明らかなり然るに彼の如きあり余は或は疑ふ彼れ一夜作りの濁酒を以て……するが如きに非ざるかさ然れさもかゝる事我いらつめ讀者にあらずさするも既に其吟題意を失せるものにして人に示すの面目を有する者あるに非ずやよし又是も一時の誤解に出てたりさするが正に是れ懸賞題に應ぜしものなり宜しく心を練り思をこらして詠出すべく叨りに筆を弄すべからざるなり嗟吁嗚いらつめ懸賞文藝を以て果して何さかする余ハ茲に深く彼等を責むるとなさず唯向後の應募者諸君に余が意を諒して深く注意を乞はんさ欲するのみ次に撰者に向て望む所は應募の文藝は凡て嚴密なる調査さ綮肯なる批評とを常に加へられ賞罰共に明らかならんを是れなり右聊感ずる所あり書して以て貴社に投す

いらつめ方へ御相談!!!

本鄉　緣梅子

諸孃に御相談申度のは數學の事です。私は昨年「數〓」さいふ雜誌を發刊しました。其目的は婦女子にも數學を教授したいといふのが主眼でした。けれど全く男子の教場さなつて、婦人は僅か五六名でした。

いらつめを購讀なさる淑女諸孃は數學が一般の學藝に緊密な關係を有するこさは御存じでせう。それ故今更其效用は云ひません。が、既に最大の價値あるものさ知ッたなら、之れと修めなければなりますまい。否修めないさ云ふのではありません。たゞ算數修めなくてはならぬさ云ふのです。ですから女學雜誌社で發兌する通信女學にも數學はあります。けれど、彼は十幾種さいふ學科を教授するのであッて、其中數學や英學を修めるには——他の學科は長足の進歩として居る事を信ずれは——隨分高價に過ぎるものです。それ故私はこのいらつめの每號一頁か二頁の紙上を借りて算術を始めから講義して傍ら質疑に應じやうさ思ひます。

諸孃の御返答で掲載するもしないも定める積りです。いかゞ？否？應？淑女諸孃急ぎ成美社へ御返答を……

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

懸賞小説募集廣告

●題 春季ニ係ル者

●頁數 一頁十二行一行廿四字詰五十頁以内

●文体 何種を限らず

●宿所 姓名は別紙に認め原稿には別號亦は符號を記する事

●期日 四月十日限堅〆切

●賞品 壹等 金拾圓 貳等 金五圓 三等 金貳圓 以下秀逸之分五種を撰拔し以良都女一ヶ年分より三ヶ月分迄亦ハ其に相當する書籍雜誌を贈呈する事

●撰者 山田美妙齋主人

●受賞之小説 は此を以良都女に掲載するか亦は一部の書として出版する事

●原稿届所 大阪市西區南堀江上通四丁目百十四番やしき 嗜文會

美人二十名

滿員の上は謝絶の事

世界第一身体白色劑料ハンドコロン完全無比なる血液清滌劑サルサ根佛國流行ポマドンヌールなどの奏効確實衛生無害あるを世に證せんため御望みの有る世の令孃令夫人其他婦人にして治療を望まるゝ方には醫學士の診察のうへ右藥劑を無謝儀にて服用せしめ且必要の衛生法を固く守らしめ不日にして肉色櫻紅肌理秀麗たらしめんとて斯る實地廣告ハ泰西殊に米國などにて行はるゝものなれども我國にては甚少し今人員二十名を限りて貴需に應ずべし有志の婦人各位は速かに申し込まるべし既に是にて奏効を得なば翁屋の製料の一大奇劑たるを知るに足るべし

明治二十三年二月八日

世界第一白色劑原料ハンドコロン、佛國新流行塞中化粧藥ポマドンヌール、日にやけぬ水、梅のゆき、薔薇、れもん等化粧最上化粧石鹼

一切化粧品專賣本舖

免許藥舖 おきなや

いらつめ第卅九號目次(明治二十三年一月廿二日)

●挿　畫…城砦雪夜の圖……小林清親
●小　說…心づくし(第四回下)……毛布野女史
●家　政…片面染めの布で半袖襦袢を縫ふ法＝半襟を仕立てる順序＝一つ身裁縫法＝中裁ち裁縫法……木下貞子
●文藝美術…未見の友君落子におくる唱歌……美妙齋主人
○乾坤の戀(唱歌)……いらつひめ
○伊勢家集(其一)
○懸賞文藝新題
●雜　纂…新年來の流行＝日本婦人(英國雜誌掲載文)＝聲をよくする心得＝漢字異語同義＝其他
●小　說、婚禮後
●答　書…花及び色の投票
●通信問答
●餘　興

いらつめ第四十號目次(明治二十三年一月三十日)

●挿　畫…木版畫の押し繪額
●家　政…押し畫作り方第四……石原一枝孃
畫の繪額
○料理法……岩間芳松
上等料理いり鳥
●文藝美術…日本韻文について學者が工夫すべき箇條……美妙齋主人
○懸賞文藝應募得點の和歌俳句及び唱歌題、美人雪夜ふそむ
○五社百詠(其四)……俊成卿
●雜　纂…聲を美くする心得＝妙計＝不作法の種類並＝詩人がうばアの言葉＝舊幕府の頃の監獄……美妙齋主人＝日本婦人＝内閣官報局新定送假名法＝夢の時間の長さ

いらつめ第四十一號目次(明治廿三年二月八日)

●挿　畫…鳩の大圖(石版色刷)……狩野良信
●小　說…心づくし(第五回)……毛布野女史
●家　政…シャツ裁縫法＝大黒頭巾裁縫法＝宗十郎頭巾裁縫法＝船底頭巾裁縫法＝早道頭巾裁縫法＝吉原頭巾裁縫法……木下貞子
●文藝美術…韻語の品格…美妙齋主人
○懸賞文章美人雪夜……撫等女史、盧野鉉吉、しづを
○舊年の死(韻文)……槐月陰史
○君よりほかに(韻文)……美妙子
○ひとつびとつ(同)……ぶろくたア
●雜　纂…日本陶器小史＝舊幕時代の監獄…美妙齋主人

印刷所　東京神田區[illegible]下町十三番地　鶴田活版所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY